

# 自然界と兒童

東京女高師附屬小學校

吉 田 弘

## 一 兒童經驗の世界

兒童の生活環境として、第一に考へねばならぬのは自然界である。兒童は經驗の集積によつて次第に伸びて行くのであるが、兒童の經驗に取つて大なる分野をなすものはこの自然界である。もよより自然界のみが、兒童の生活の全部ではない、親、兄弟、友達、教師なきに取りまかれた世界もあれば、玩具に取りまかれた世界もあるわけである。親、兄弟なきの人々に取り圍まれた世界が、人倫道德への成長の分野に關するものとするれば、玩具の世界は構成工夫、情操なきへの展開の分野に關するであらう。然らば自然界は何の分野に關するだらうか。知識の分野を第一とし、情操やその他の都面に關するであらう。かゝる意味に於て、兒童教育上等閑に附するこゝの出來ぬものは、自然界に於ける兒童の生活である。では自然界を教育的に見る時には、何をもつて本質の第一とすべきであるか。これは申すまでもなく、兒童の經驗する世界として見べきことである。經驗に就いては、「百聞は一見に如かず」昔から言はれる通り、經驗に取つて代る何物も存しない。誤れる教育觀は、説明をもつて經驗に代へんとする試みをなすのであるが、説明はあくまで説明であつて、經驗の代用はなり得ない。この點が今後の教育に於て最も考慮すべき點であつて、經驗を通して兒童の成長發展を考へなければならぬ。茲に於て、經驗の重要な分野をなす自然界といふものが、教育上から大いに考慮されなければならぬのである。幼稚園

の教育は知らず、小學校の初學年の教育としては、從來はあまりに、自然界についての考慮が足りなかつたのである。

## 二 經驗の價值

經驗が我々人類の知識發達に對して必要であることは、一々説明を要しないことであるが、假りに一人の兒童が生れた時に、一つの部屋に入れたきりで、世間及び社會と没交渉の生活をなさしめたとき考へて見るに、その兒童は如何なる發育をなすであらうか。恐らく言語も發することが出来ないだらうと思ふ。

我々人類の言語は、人類が發生したと同時に恐らく發生したであらうと思ふが、直ちに人間と人間との交渉によつて出來たものは考へられない。何と言つても、自然界の事物及び現象を通して出來た言語が最初のものだらうと思はれる。言語をいへば、人々人間の間に交はされるものであつて、自然は没交渉の様に思ふかも知れぬが、自然をいふものがないには、人類の生活も不能であつたと同様に、言語の發生は考へられないのである。

人間生活の中の重要な要素をなす、善か悪かの、比較的高尚なる道德的の事柄にしても、その根原を考へて見るに、自然界と没交渉ではあり得ない。否考へ様によつては、自然物をいふものが、道德發生の根本を成してゐることを考へてもよいのである。自然物の利用をいふことが、人類生活の根幹をなすので、自然物が不足して來ると、人間の所有慾をいふものが之に働きかけて來る。その時に他人のものは取つてならぬといふ道義や、自分自身の所有權をいふものがそこに發生して來る。同じこの世界に生存してゐる人類同志が、所有權をいふものの中に於て、相互に衝突しない様にするために、そいふ高尚な道德も發生したことを考へられる。道德でさへもがさうであるから、更に具體的なる色々の事柄に関する言語をいふものが、自然物、自然界を仲介にして發生發達したものであることは、容易に考へ得ることである。

この様なわけで、自然界に於ける経験さいふものは、人智の發達に絶大なる關係を有するものであるのに、從來の兒童の教育にあつては、制度の上からも、教育教授の實際からしても、自然界に對して、あまりに無關心ではなかつたらうかと思ふのである。幼稚園及び小學校の幼學年の教育に於て、自然界を環境とする教育に、乗り出して欲しいものである。

### 三 自然と人生との交渉

更に別の方面から、自然と人生との關係を考究して見やう。文化の標識なる文字について見るに、之にも自然界との交渉が十分に窺はれる。色々の樹木に關する文字を考へて見るのに、松、櫻、梅、桃なき、樹木の名を示す文字をあげて見るに、何れにも木扁がついてゐる。これは漢字であるけれども和名でいふに、「まつのき」「さくらのき」「うめのき」「さいふ様に、「き」「さいふ言葉がいつもついてゐる。これは我らの使用する文字や言葉が、自然物に關聯して出來たさいふことの確かな證據になるばかりでなく、かゝる文字や言葉の本質を考へて見るに、理科で我々が研究する所の分類學さいふもの芽生がそこに見出される。

即ち地球上にいろいろの植物が繁茂してゐる。その中で草本には草本らしい言葉、木本には木本らしい言葉が發生するさいふのは、分類學の見方が、至つて幼稚な時代から、既に我々人類の頭の中に働いてゐたさいふ證據になるのである。分類學的な智能を働かして、色々の言葉を創製したのではあるが、人智が進んでゐなかつた結果は、その言葉の中に、多少の誤りがないではない。樹木などの判りやすいものには、さうした例は少いが、魚類を現す文字などになるに、さうした例がなか／＼多い。鱒・鯛・鮭・鯛・鮭・鮭、本當の魚類に魚扁がついてゐるのは何ら差支ないが、鱒・章魚さいふ様な文字をあげて見るに、鱒は哺乳類でありながら魚扁になつてゐるし、章魚は軟體動物であり乍ら魚さいふ字がついてゐる。こ

れなきは、言語發生の當時、人類は既に分類學的な見地に立つて、さういふ言語、文字を産出したのであるけれども、本當の分類的知識がなかつたために、かゝる誤謬に陥つたのである。しかし我々はこゝで、かゝる語源の研究をなさうとするものではない。人智の發達に、如何に自然物が重大なる關係をもつてゐるかといふ、引例をなしたに過ぎない。それで、我々が小學校へ入つて來た兒童の教育を考慮する時に、自然界をかけ離れた没交渉の教育をしやうとするこゝが、我々人類の先祖が發達して來た跡形を眺めて見ても、そこに不都合な點が甚だ多いといふこゝを、深く考慮に入れて頂き度いのである。之は又人類が經過して來た文化の各段階を、順序よく踏襲させるといふこゝが、教育の眞髓であるこゝされる教育理論に照らして見る時、教育初步に於ける自然界尊重の必要を一層痛感するものである。之は單に小學校の教育に於てのみでなく、幼稚園の教育としても考慮すべき重大な問題ではないかと思ふのである。

#### 四 自然界の親しみ

然らば幼稚なる兒童の自然界に於ける經驗は如何なる状態をもつてなさるべきであるか。この時對象となるものは、漠然とした概念的なる自然ではない。植物もか動物もいふ具體的のものが、その對象でなければならぬ。自然現象なきといふ、不態現のものであつても、之は不適當である。

先づ植物でいへば、植物を採集させたり、植物を栽培させたりする所にある。勿論植物採集といつても、植物學の研究でもなす様な、植物品種の蒐集を意味するものではない。幼少な兒童にしてなさしむべきこゝは、つくし摘みとか、花摘みとかいふ程度のものでなければならぬ。兒童は蒐集の本能を有するもの故、この様な意味での植物採集をなさしむるこゝは、非常に喜んでなすものである。この取扱にて數量の生活もなさしめられるし、植物名を知らせるこゝも出来る。勿論幼稚なる兒童に對して、之は何といふ名前のものだき教へるこゝは避くべきこゝで、かゝる經驗をなす間に、之は何こゝ

いふ物かミ児童をして自發的に、質問せしむる様に仕向け、その上にて名稱を授くべきものであるは言ふを俟たないのである。又たんば摘みをやらう、すみれ摘みをやらうといふことになれば、名前のために名前を教へるのでなく、仕事の形態、遊びの形態をもつて、植物名に親しむ機會ミすることが出来る。名稱の取扱ばかりではない、感官を働かし得る方法もある。赤い花を出来るだけ多く集めよ、白い花を集めて見よといふことにすれば、色に對して感官を働かす機會をつくり得るのである。又例へば、クローバの茂つた處につれ行れて、四つ葉をさがして見よといふことになれば、數の觀念を興味深き仕事の中に、十分に取扱ひ得ることになる。こゝでは二三の例をのべたのであるが、かゝる工夫をなす時には植物を利用して、感官を働かせる機會も出来るし、自然に親しむ機會もつくり得るのである。

植物の栽培については、幼兒にも種まき位はなさしめられる。發芽後にいろいろミ世話させることができれば、児童の植物に對する愛著心を喚起し得ることか、是非ミも實施して頂き度いのである。

次には動物の愛護である。これは植物ミちがつて、一層児童に親しみの情をよび起し得るもの故、愛護の精神を高潮するには適當のものである。兎をかふ、鶏をかふ、金魚をかふ。さういふ場合に、児童達は自分の愛する動物ミして、それだけこれに愛著を感じるこゝであらうか。かくして児童が動物を愛して、日常之ミ親しんで行く時には、児童の心は決して淺薄なものになり、不良のものになるこゝはないのである。かういふ點からして、動植物の愛護ミいふものを、幼少の児童の頃から、重視して行き度いものミ思ふのである。

日本の児童は、只一人で野原に坐つて、半日を遊びくらすこゝが出来ないが、外國の子供はそれが出来るミ言はれる。果して然りミすれば、我が國の幼少の頃に於ける、自然界を通じての教育が、考慮されてゐないのによるのであるまいか。而も之が科學的なる發展への障礙にでもなるかミすれば、それは確になしミ思ふが故に、我が國に於ける幼少時の教育ミ自然界との關係には、今一段の考慮考察が加へられて然るべきものミ思ふのである。